



今から5年前、新潟県佐渡市で廃校になった旧西三川小学校を酒蔵にする「学校蔵プロジェクト構想」がスタートした。そして、待望の新酒「学校蔵」がこの11月に発売された。

仕掛け人は、佐渡市で126年の歴史を持つ「真野鶴」の醸造元・尾畑酒造株式会社の専務、尾畑留美子さんだ。私が日本政策投資銀行の新潟支店長だった約12年前からのご縁だ。当時、尾畑さんは焼酎ブームに押される日本酒の復活に海外も視野に入れて飛び回っていた。

「小学校は創立136年の木造校舎。真野灣を一望できる岸壁に立ち、日本で一番夕日がきれいな小学校です。酒蔵として残したい」と尾畑さん。学校蔵の施設は、日本酒の仕込み（10月～3月）時期を外して、酒造りの学びを通じて国内外との交流や地域のコミュニ

廃校を活用した酒蔵

いしもり 石森 亮

ティーづくりをする拠点として活用されている。

新酒「学校蔵」のラベルは、廃校になった小学校の校章をアレンジしたデザイン。味は佐渡産の酒米を100%使用し、木造校舎のぬくもりをイメージして佐渡産の杉材を浸したる酒のような風味にしたという。小学校の校訓「向上心」は、学校蔵では「幸醸心」に置き代わった。取り寄せた新酒「学校蔵」を口に含んでみた。佐渡の風景がよみがえってきた。

公共施設の民間活用は、全国的にも多くみられるようになってきたが、実態は規制も多く、まだまだ少ない。このたび、苦小牧市の行政改革推進審議会の会長を引き受けた。少子高齢化、人口減少時代の公共施設の運営は、効率性の観点に加えて地域活性化の観点から民間活力を導入することが大切である。そのためには一層の規制緩和を避けては通れない。

（苦小牧港開発社長）